黒潮町

津波防災教育プログラム（案）

【平成 27 年 3 月版】

目　　次

1.**はじめに ― “防災知識の教育”の土台に“命の教育”の実施 ―**..... 1-1
2.**命の教育**..... 2-1
2.1　ねらいと学習内容 2-1
2.2　学習指導案例 2-3
2.2.1.　小学校（1） 2-4
2.2.2.　小学校（2） 2-6
2.2.3.　中学校（1） 2-8
3.**防災知識の教育** 3-1
3.1　ねらいと学習内容 3-1
4.**体験型学習の効果的手法の提案** 4-1
5.**各教科の地震津波災害に関連する授業内容** 5-1
5.1　全学年共通 5-1
5.2　小学校 5-2
5.2.1.　小学校低学年 5-2
5.2.2.　小学校中学年 5-3
5.2.3.　小学校高学年 5-4
5.3　中学校 5-6

資　　料

資料 1. 防災教育必携～指導のココロエ～
資料 2. 黒潮町で津波防災教育を実施するための補助資料集
資料 3　黒潮町の小中学校における津波防災教育の実践事例集

1.　　はじめに ― “防災知識の教育”の土台に“命の教育”の実施 ―

東日本大震災において、主体的に避難をした岩手県釜石市の沿岸の子どもたちが、想定を大きく越える大津波から生き抜いたこと（釜石の奇跡）が大々的に報じられました。全国で防災教育の必要が再認識され、釜石市の防災教育を参考に、南海トラフ巨大地震の新想定が公表された地域を中心する全国各地で様々な取り組みが実践されています。

釜石市での防災教育もそうであったように、津波からの逃げ方や津波の特性などの防災知識を覚えさせるだけではなく、子ども達が**主体的に避難する姿勢を育む**ことが防災教育では最も重要です。そして、その主体的な姿勢を育む ― 避難しよう、防災に取り組もうとする動機付けをする ― 上で、最も重点を置いて取り上げなければならないことは、**“命の教育”**です。

「大地震があったときに君が逃げなかったら、お父さんお母さんはどうするだろう？」
「大地震で家具が倒れて、友達が下敷きになってしまったら、君ならどうする？」
「高台から離れた場所におじいちゃんおばあちゃんたちがいたら、君ならどうする？」

災害時には、答えを示しにくい命に深くかかわる状況に陥ることが考えられます。そのような**命が危険にさらされる状況での行動を考えて、子どもたちの心を大きく揺さぶる**ことで、自分や家族、地域の人たちの命の尊さ、命の意味を子どもたちに考えさせることを通し、その日そのときに起こることを**「我がこと感」をもって捉える**ことができます。その結果、「ひとりでいるときでも避難できるようにならなきゃ」、「地震が起こったときに困らないように日ごろから備えておかなきゃ」、「周りの人も助けられるようにもならなきゃ」といった**内発的な自助・共助意識**が育まれ、日頃から最善を尽くそうと考えて行動する姿勢、つまりは**主体的な姿勢の醸成**へとつながります。そして、**“命の教育”を土台とすることで、“防災知識の教育”の教育的効果も高まる**ことが期待されます。また、防災は、学んだことを避難訓練などの実践に結び付けやすいので、さまざまな実践をすることで、その日そのときに生き抜くことができる人になれるはずです。

そこで黒潮町では、「高知県安全教育プログラム（平成 25 年 3 月）」を基本に“防災知識の教育”を展開しつつ、防災教育をする根源につながる“命の教育”にも主眼を置き、さらに黒潮町の地域特性や個別具体的な事例も加味した独自の「黒潮町津波防災教育プログラム（案）」を作成しました。

黒潮町津波防災教育プログラムでは、小中学校の 9 年間の防災教育を体系立て、防災知識の教育（狭義の防災教育）と命の教育（広義の防災教育）の 2 つに大別して作成しました。そのほか、防災教育を実施する上で効果的な手法や学校教育の様々な場面で津波防災教育を行うことを念頭においた資料をまとめましたので、ご活用ください。

表．黒潮町津波防災教育プログラム（案）の概略

<table>
<tr><th colspan="3"></th><th colspan="4">全体のねらい　（9 年間で培い、一生涯持ち続ける姿勢）</th></tr>
<tr><th colspan="3"></th><th colspan="2">命の教育（広義の防災教育）</th><th colspan="2">防災知識の教育（狭義の防災教育）</th><th rowspan="2">避難訓練</th></tr>
<tr><th colspan="2"></th><th>ねらい</th><th>学習内容例</th><th colspan="2">ねらい</th><th>学習内容例</th></tr>
<tr><td rowspan="5">小学校</td><td rowspan="2">低学年</td><td rowspan="2">自分の命に関わることであると理解する</td><td rowspan="2">■防災を“我がこと”として捉えるための学習
例　『地震が起きて、津波が来るかもしれないとき、お母さんお父さんの迎えを待つ？それとも一人で逃げる？』
■解決策を考えるための学習
例　『そうならないために、日頃から何をしておけば良いのか？』
■考えた対応を実践（具体化）するための学習
例　『津波てんでんこ』</td><td rowspan="2">「危険を回避する力」を身に付ける</td><td>1 年生
・学校や自宅でも逃げられる</td><td>①　学校や自宅で地震が来たときに身を守る方法を知る
②　学校や自宅で津波が来たときに身を守る方法を知る
③　学校や自宅周辺の避難場所を知る</td><td rowspan="9">1．児童生徒が在校中を想定した避難訓練
■地震発生時間帯を変えて訓練を実施
・授業中
・休み時間中
・クラブ活動中　など
■複数の避難先が考えられる場合には、避難先も変えて訓練を実施
・校舎屋上
・校庭
・校外避難場所　など

2．児童生徒が登下校中を想定した避難訓練
■実施方法
・集団下校中に実施
・保護者参観後などに、児童生徒と保護者が一緒に帰宅している途中で実施
・スクールバス乗車中に実施
■避難先

3．その他の状況を想定した避難訓練
■児童生徒が在宅中を想定した避難訓練
→黒潮町や地域が実施する避難訓練への参加を義務化
■遠足などの校外活動中を想定した避難訓練</td></tr>
<tr><td>2 年生
・地域の安全な場所を知る</td><td>①　どのくらいの地震・津波が発生する可能性があるか知る
②　避難場所をどこにいても見つけられるようになる</td></tr>
<tr><td rowspan="3">中学年</td><td rowspan="3">家族の命に関わることであると理解する</td><td rowspan="3">■防災を“我がこと”として捉えるための学習
例　『地震が起きて、家具が倒れてきて、家族が下敷きになってしまった。一人で逃げる？それとも助ける？』
■解決策を考えるための学習
例　『そうならないために、日頃から何をしておけば良いのか？』
■考えた対応を実践（具体化）するための学習
例　『家具の固定をする』</td><td rowspan="3">「危険に気づく力」を身に付ける</td><td>3 年生
・地域の危険を知る</td><td>①　どのくらいの地震・津波が襲来する可能性（想定や過去の実績）があるか知る
②　通学路の危険な場所（近くの安全な場所）を知る
③　危険から身を守る方法を知る</td></tr>
<tr><td>4 年生
・津波が来た場合の被害を考える</td><td>①　地震・津波の発生メカニズムを知る
②　津波と普通の波の違いを知る
③　津波から地域を守る対策を知る（ハード設備、緊急避難情報など）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">高学年</td><td rowspan="2">他者の命に関わることであると理解する</td><td rowspan="2">■防災を“我がこと”として捉えるための学習
例　『避難の途中で、お年寄りが疲れて立ち止まってしまっている。そのまま一人で逃げる？それとも助ける？』
■解決策を考えるための学習
例　『そうならないために、日頃から小学生として、何ができるか？』
■考えた対応を実践（具体化）するための学習
例　『お年寄りの避難の手助けの練習をする』</td><td rowspan="2">「他者を思いやる力」を身に付ける</td><td>5 年生
・安全な場所を教えられる</td><td>①　大地震で身の回りにどんなことが起きるかを知る
②　津波避難の３原則を理解する
③　地域へ発信する</td></tr>
<tr><td>6 年生
・率先避難者になる</td><td>①　津波の様々な特徴を知る（遠地津波など）
②　津波から地域を守る対策を知る（緊急地震速報など）
③　率先して避難できるように日ごろからできることを考える</td></tr>
<tr><td colspan="2">中学校</td><td>災害文化の継承に貢献する素養を身に付ける</td><td>■防災を“我がこと”として捉えるための学習
例　『被災した昔の人が石碑をいくつも作っている。どんな想いがこめられているだろうか？』
■解決策を考えるための学習
例　『石碑に込められた想いを考えて（知って）、中学生として何ができるか？』
■考えた対応を実践（具体化）するための学習
例　『石碑に込められた想いを地域の人たちに発信する』</td><td colspan="2">1 年生
「自ら学ぶ力」を身に付ける</td><td>①　地震津波から命を守る方法を考える
②　地理的環境から地震津波を考える
③　災害歴史から地震津波を考える</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td></td><td colspan="2">2 年生
「自ら行動する力」を身に付ける</td><td>①　災害情報から次の情報を考える
②　普段と違う場面での安全確保を考える
③　避難後の行動を考える</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td></td><td colspan="2">3 年生
「自ら貢献する力」を身に付ける</td><td>①　災害歴史の裏側にある人の想いを考える
②　家庭・地域啓発を考える
③　家庭・地域貢献を考える</td></tr>
</table>

2.　命の教育

ここでは、内発的な自助・共助意識を育むための“命の教育”について、どのような内容を取り扱えばよいのか、学習指導案例もまとめました。

2.1　ねらいと学習内容

学年別のねらいや理解度に応じて、命の教育を実践する際の効果的な発問を以下の表にまとめました。下表に書いてあるような学習内容に沿って１つの授業を作成してもよいですし、これまでの学習指導案に発問をひとつ組み込むといった使い方でも、子どもの心を揺さぶり、内発的な自助・共助意識を育むことが期待できます。

小学校における命の教育では、地震津波が命に関わることであると理解させることにねらいを置いており、学齢が上がるにつれて、自分、家族、地域社会と対象規模が大きくなるように設定しています。そして、中学校では、命に関わることとしてクローズアップするのではなく、自分自身の一部として、延いては社会の一部の災害文化として還元させることを目指し、義務教育課程を卒業してからも災害文化を継承する素養を身に付けさせることをねらいと設定しています。

学習内容例については、以下の３項目を立てて記載しています。

①防災を“我がこと”として捉えるための学習

‥‥子どもたちに命について考えさせるために、一概に答えが出せないような問いを記載しています。その問いを通して、「考えたくはないが、陥る可能性のある深刻な状況」を想像させて、子どもたちの心を揺さぶり、現実感を持って捉えさせることを目的としています。

②解決策を考えるための学習

‥‥①の発問に対して子どもたちが悩みながら出した答えを聞いて、そもそもそういった悪い状況に陥らないようにするために、日頃から何をしておけばよいのかといった枠組みに落とし込んで、さらに考えさせます。

③考えた対応を実践（具体化）するための学習

‥‥②で受けた答えを元にどんな実践に結び付けることができるかの事例を示しています。

		命の教育（広義の防災教育）	
		ねらい	学習内容例
小学校	低学年	自分の命に関わることであると理解する	**①防災を“我がこと”として捉えるための学習** 例　『地震が起きて、津波が来るかもしれないとき、お母さんお父さんの迎えを待つ？それとも一人で逃げる？』 **②解決策を考えるための学習** 例　『そうならないために、日頃から何をしておけば良いのか？』 **③考えた対応を実践（具体化）するための学習** 例　『津波てんでんこ』

		命の教育（広義の防災教育）	
		ねらい	学習内容例
	中学年	家族の命に関わることであると理解する	**①防災を“我がこと”として捉えるための学習** 例　『地震が起きて、家具が倒れてきて、家族が下敷きになってしまった。一人で逃げる？それとも助ける？』 **②解決策を考えるための学習** 例　『そうならないために、日頃から何をしておけば良いのか？』 **③考えた対応を実践（具体化）するための学習** 例　『家具の固定をする』
小学校	高学年	他者の命に関わることであると理解する	**①防災を“我がこと”として捉えるための学習** 例　『避難の途中で、お年寄りが疲れて立ち止まってしまっている。そのまま一人で逃げる？それとも助ける？』 **②解決策を考えるための学習** 例　『そうならないために、日頃から小学生として、何ができるか？』 **③考えた対応を実践（具体化）するための学習** 例　『お年寄りの避難の手助けの練習をする』
中学校		災害文化の継承に貢献する素養を身に付ける	**①防災を“我がこと”として捉えるための学習** 例　『被災した昔の人が石碑をいくつも作っている。どんな想いがこめられているだろうか？』 **②解決策を考えるための学習** 例　『石碑に込められた想いを考えて（知って）、中学生として何ができるか？』 **③考えた対応を実践（具体化）するための学習** 例　『石碑に込められた想いを地域の人たちに発信する』

2.2　学習指導案例

命の教育に資する学習指導案を以下にまとめました。指導する時間としては、学級活動（特別活動）や総合的な学習の時間と考えているほか、命の尊重や他者への思いやりといった切り口で、道徳の時間を活用できると思います。

No.	分類	対象学年	ねらい	掲載ページ
1	小学校(1)	小学校3･4年生	『自らで判断して、行動することの大切さを知る』 『日頃から、家族と信頼関係を築いておくこくことを促す』	2-4～2-5
2	小学校(2)	小学校5･6年生	『“津波てんでんこ”の意味を知り、他者への思いやりや自らの命を大切にする心を養う』	2-6～2-7
3	中学校(1)	中学校全学年	『地域社会の一員として、地震･津波に備えた行動を今から始めて、やり続けることを促す』	2-8～2-9

2.2.1. 小学校（1）

■**対象学年**　：小学校 3～4 年生
■**ねらい**　：『自らで判断して、行動することの大切さを知る』
『日頃から、家族と信頼関係を築いておくことを促す』
■取り扱いの時間：学級活動、総合的な学習の時間、道徳
■**授業構成**

	学習活動	主な発問（◆） 予想される子どもの反応（◇）	指導上の留意点（◎） 評価のポイント（※）
導入	1) 大きな地震が発生した場合、どうしたらよいかを復習する	◆大きな地震が起きたら、どうしたらよかったでしょうか？ ◇すぐに高いところへ避難する ◇学校にいた場合には、避難訓練の通りに行動する	◎“揺れたら高いところにすぐに逃げる”ことを確認する ◎“いざというときに、本当に逃げられるのか”という点に興味を持たせる
展開	2) 様々な状況にあるときに地震が発生した場合を想像し、どうするかを考える	◆お風呂に入っていたときに地震があったらどうする？ ◇裸のまま逃げる／洋服を着て逃げる ◆寝ているときに地震があったらどうする？ ◇パジャマで逃げる／着替えてから逃げる ◆逃げようとしたときに、飼っているペットが見当たらなかったらどうする？ ◇ほっといて逃げる／探しにいく ◆逃げようとしたときに、弟や妹が見当たらなかったらどうする？ ◇ほっといて逃げる／探しにいく	◎“地震はいつどんな状況のときに発生するかわからない”ことをおさえる ◎頭ではわかっていても、“すぐに逃げることのできない状況がある”ことをおさえる ◎“日頃から、そのようなときにどうしたらよいのかを考えておくことが大切である”ことをおさえる
	3) 一人でいた場合の対応を考える	◆自宅に一人でいるときに、大きな地震が発生したらどうする？ ◇一人ですぐに高いところへ逃げる ◇親が帰ってくるのを待つ、親に電話する	◎“お父さん･お母さんは、みんなことが大事だから、みんなが『待つ』のであれば、きっと迎えにくる”ことをおさえる
	4) 資料「津波てんでんこ」を読み、お父さんお母さんが迎えにきてしまったときのことを考える	◆大輝くんは、一人で逃げちゃったけど、これでよかったのかな？ ◆もし、大輝くんが一人で逃げなられない子で、お父さん、お母さんが迎えにきてしまったらどうなっていたでしょう？	◎“お父さん･お母さんが迎えにきたら、津波に流されてしまう可能性ある”ことをおさえる ◎“お父さん･お母さんが迎えにくるのは、みんなに「一人では避難できないのではないか」と思われているから”であることをおさえる
	5) 家族みんなで助かるためには、どうしておくべきかを考える	◆お父さん、お母さんが迎えにこないようにするためにはどうしたらよいでしょう？ ◇お父さん･お母さんに“ちゃんと逃げて”と言う ◇日頃から、別々の場所にいるときの避難方法を相談しておく	◎“避難方法を相談しておくことはもちろん重要だが、何より大事なことは、『一人でいてもみんなはちゃんと逃げる子』だとお父さん･お母さんに信頼してもらうことである”ことをおさえる
まとめ	6) 授業の感想を交流し、授業をまとめる。	◆今日、おうちに帰って、お父さんお母さんとどんなことを相談しようと思いますか？	※“一人でも行動できる主体性”を引き出すことはできたか？ ※“家族と信頼関係を築いておく”ことの大切さを理解できたか？

■資料『津波てんでんこ』

『津波てんでんこ』とは、「大きな津波が来たら、家族のことは考えずにてんでんばらばらに一人で逃げなさい」という三陸地方に伝わる教えです。

あの日、東北地方の港町に住む大輝は、小学校から家に帰ってきて、ひとりでテレビゲームをしていました。大輝のお父さんもお母さんも、仕事でまだ帰ってきていませんでした。そんなとき、大きな地震がおきました。立っていられないほどの大きな地震で、家中のものが倒れてきそうでした。大輝はすぐさま布団を覆いかぶって、地震の大きな揺れがおさまるまでじっとしていました。何分も続く、大きな地震でしたが、大輝に向かって何も倒れてこなくて、怪我をせずにすみました。

地震の揺れがおさまったあと、大輝はひとりで家を飛び出しました。「大きな地震があったときには津波が来る」と学校で教わったことを思い出したからです。

「自分の身は自分で守れ」、

「お母さんやお父さんのことを考えないで、まずは自分ひとりでも生き延びろ」

という言葉を思い出して、お母さんとお父さんと話し合って決めていた高台までひとりで駆け上がりました。

大輝に続いて、同じように高台まで避難していた人が、高台からまだ避難していない人たちに向かって、「津波がくるぞー」と声をかけていました。

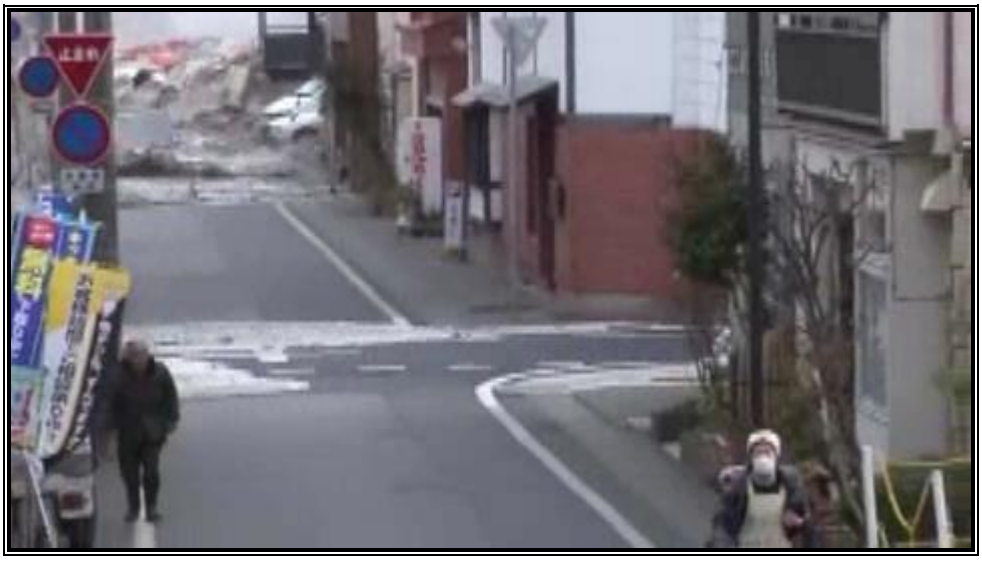
しばらくすると、海が盛り上がって、津波が陸にあがったのが見えました。どんどんと流れ込んできた津波で、壊されている建物の音や車のクラクションの音が町中から聞こえてきました。高台に避難してきた人の中には、家が流されて泣き叫ぶ人もいました。また、ひとりで避難してきた人が、家族が見つからないため探しに戻ろうとしているのを、周りの人たちがとめていました。大輝もお父さんとお母さんが一緒にいなくて、すごく不安でした。だけど、「お父さん、お母さんもどこかに避難しているはず」と信じ、高台でじっとしていました。

2.2.2.　小学校（2）

■**対象学年**　　：　小学校 5～6 年生
■**ねらい**　　：『“津波てんでんこ”の意味を知り、他者への思いやりや自らの命を大切にする心を養う』
■取り扱いの時間：学級活動、総合的な学習の時間、道徳
■**授業構成**

	学習活動	主な発問（◆） 予想される子どもの反応（◇）	指導上の留意点（◎） 評価のポイント（※）
導入	1）“津波てんでんこ”の意味を紹介し、津波からの避難方法を復習する	◆“津波てんでんこ”とは、『津波のときは、家族のことは考えずにてんでばらばらに逃げなさい』という三陸地方に伝わる教えです。 ◆大きな地震が起きたら、どうしますか？ ◇すぐに高いところへ避難する	◎“揺れたら高いところにすぐに逃げる”ことを確認する ◎“いざというときに、本当に逃げられるのか”という点に興味を持たせる
展開	2）動画を見て、感想を交流する	◆この動画は、東日本大震災のときに、岩手県釜石市に津波が襲来した時の様子を撮影したものです。感想などを発表してください。 ◇津波はとても強い、早い ◇逃げ遅れている人がいる　など	◎津波がすぐそこまで来ているのに、避難している途中の人がいることをおさえる
	3）“津波てんでんこ”は現実には難しいことを理解する	◆もし、君がこの動画の撮影者だったら、逃げ遅れたおじいちゃんを助けに行きますか？ ◇助けに行く／助けに行かない ◆このおじいちゃんとその日の朝に挨拶していたらどうですか？ ◇助けに行く／助けに行かない ◆このおじいちゃんが、君の祖父だったらどうですか？ ◇助けに行く／助けに行かない ◆もし、君がこのおじいちゃんのように逃げ遅れたとしたら、誰か助けにきてくれると思いますか？ ◇助けにきてくれる／きてくれない ◆君は、誰かに助けにきてもらいたいですか？ ◇助けにきてほしい／きてほしくない	◎答えだけでなく、その理由についても意見を求め、自分の命と他者を助けることの葛藤や、人によって考え方が違うことをおさえる
	4）“他者を助けること”と“自分の命を守ること”の意味を考える	◆“津波てんでんこ”は一人で逃げろ、と言っています。では、このようなおじいちゃんは助けなくてよいのでしょうか？」 ◆このおじいちゃんのために、どんなことができるでしょうか？」 ◇やっぱり見過ごせない ◇すぐに避難するように普段から話しておく	◎いざというときには、まずは“自分の命を守る”ことに全力を尽くし、その後、“助けられる場合には、人助けする”ことをおさえる ◎人助けは、いざというときだけでなく、“日頃からできることもある”ことをおさえる
まとめ	5）授業の感想を交流し、授業をまとめる。	◆自分の命を守り、周りの人の命も助けるために、今からできることを考えてみよう。」	※“自分の命を大切にする”という気持ちを引き出すことはできたか？ ※“他者への思いやり”を持ち、人助けのための行動を理解できたか？

■資料　動画『3.11 釜石市に津波が襲来』



※この動画は、平成 23 年 3 月 11 日に岩手県釜石市の市街地（市役所前）に津波が襲来した様子を一般市民が撮影したものです。動画中に、背後に津波が迫ってきているにもかかわらず、高齢者がゆっくりと歩いている様子が撮影されており、本時ではその様子を題材としています。

※『津波てんでんこ』には、4 つの意味があるものといわれています。

1）一家全滅を免れるための非常な掟

「大きな地震があった場合には、一家全滅を免れるため、家族のことも考えず、でんでばらばらに避難せよ」という地震発生後の津波避難のあり方を伝える

2）家族を亡くした者への慰めの言葉

津波によって家族を亡くし、自分だけ生き残ってしまったことを悔やむ人に対して、「仕方なかったんだ」と慰めるための言葉

3）率先避難を促す言葉

地震発生後、すぐに避難を開始することができる人は多くない。しかし、周辺の人が避難している様子を見ると、それにつられて避難することができる人は多い。そのため、てんでばらばらに避難する、すなわちすぐに避難することを促すことで、地域全体の避難を促す

4）家族間の信頼関係の構築

頭ではわかっていても、家族のことはかまわずに自分一人で避難することは難しい。そのため、いざというときに本当にてんでばらばらに避難することができるように、日頃から家族で相談し、「いざというときはちゃんと避難しているはず」とお互いに信頼できるような関係をつくっておくことを促す

2.2.3.　中学校（1）

■**対象学年**　　：中学校 1～3 年生
■**ねらい**　　：『地域社会の一員として、地震･津波に備えた行動を今から始めて、やり続けることを促す』
■取り扱いの時間：学級活動、総合的な学習の時間、道徳
■**授業構成**

	学習活動	主な発問（◆） 予想される子どもの反応（◇）	指導上の留意点（◎） 評価のポイント（※）
導入	1) 中学生になってから、津波防災について学んできたことを振り返る	◆今、ここで大きな地震が起きたら、どうしますか？ ◇すぐに高いところへ避難する ◆周りの人たちは、どうすると思いますか？」 ◇一緒にすぐに逃げると思う ◇一人で避難できない人もいるはず	◎自分たちだけでなく、地域の人たちについても考えさせる ◎“地域のために、何ができるか”という点に興味を持たせる
展開	2) 資料『語り伝えよ』を読み、感想を交流する	◆『語り伝えよ』を読んで、印象に残った部分やその理由を発表してください。 ◇被災経験を語り継ぐことは大切だ ◇日頃から津波に備えておく必要がある	
	3) 先人が被災経験を語り伝えている理由を考える	◆祖父は、津波を経験したわけではないのに、津波の経験を孫に語り継いでいるのはなぜだろう？ ◇津波から何がなんでも家族を守りたい ◇逃げるしかないことを伝えたい ◇両親や祖父母に教わった教訓を語り継がねばならないという使命感	◎“津波によって被災した先人の『後世に自分たちと同じ思いをさせたくない（津波犠牲者を一人もだしたくない）』との思いが語り伝えさせている”ことをおさえる
	4) 今後、地震津波に備えて、中学生として何をすべきかを考える	◆今後、地震･津波に備えて、私たちは何をしたらよいだろうか？ ◇被災経験を語り継ぐことは大切だ ◇日頃から津波に備えておく必要がある ◇避難訓練に参加する	
	5) 東日本大震災後の作者の気持ちを考える	◆東日本大震災で、両石地区は大きな被害を受けて、昭和三陸津波で犠牲者は 3 人だったのに、この度の津波で 45 人が犠牲となってしまった。 ◆今、この作文の作者は、いったいどんな気持ちでいるだろうか。今後、地震･津波に備えて、何をしていこうと考えているだろうか？ ◇後世に同じ思いをさせたくない ◇この被災経験を語り継いでいこう ◇語り継ぐだけでなく、行動していこう	◎津波で犠牲になった理由として、“過去の被災地域よりも高い所に移転したことで、もうそこは大丈夫と思って避難せずに亡くなった方がいたこと”、“避難訓練の参加者は少なかったこと”をおさえる ◎“被災経験を語り継ぐだけでなく、『日頃から備える』という行動を継承していくことが重要である”ことをおさえる
まとめ	6) 授業の感想を交流し、授業をまとめる。	◆今後、地震･津波に備えて、私たちは何をしたらよいだろうか？もう一度、考えてみよう。	※地震津波に対する備えを“今すぐ始めよう”という気持ちを引き出すことはできたか？ ※“始めたことを継続する”ことの大切さを理解できたか？

■資料１　生徒作文『語り伝えよ』

【資料-531】生徒作文「語り伝えよ」

語り伝えよ

山崎　蒔野

この記念碑は、いつしか無くなるであろう。しかし、この恨みを滅してはならない。この記念碑のことを口にして、長く子孫に語り伝えよ。両石村をもって死んだもの７９０人。その狂乱の中、無事生き残ったものわずか２０４人のみ。ああなんたる悲劇であろうか。

私の住む両石は、明治２９年と昭和８年の２回、大きな津波の被害に遭っています。明治２９年の三陸大津波から１１３年。今年も祖父に連れられ、家族みんなで、両石海嘯記念碑に手を合わせました。

祖父は私が小さい頃から、津波の話をしてくれます。しかし、祖父は、２回の津波の後に生まれたので、実際には体験していません。だから、津波の話をするときには、おじいちゃんのおじいちゃん、おじいちゃんのお父さんがよく登場します。

「おじいちゃんのおじいちゃんとお父さんは、避難所に着いてからも、波が上がってくるかもと、思うと怖くて、避難所よりも高いところまで逃げたんだ。」

津波の恐ろしさを祖父が私に伝えてくれます。荒れ狂う大波、飲み込まれる人々、響き渡る阿鼻叫喚の声。家族がバラバラになる悲しさ、祖父の話を聞いていると、先人たちの泣き叫ぶ声とともに、おじいちゃんのおじいちゃん、おじいちゃんのお父さんの、こんなに悲しい思いを二度と繰り返させたくないという強い意志を感じてなりません。

両石では、明治には８００人もの人が亡くなりました。しかし、昭和の津波の時には、死者は３人。地域で避難訓練をし、それぞれの家族が、先人たちの教訓を代々語り継ぎ、守り続けてきた成果でした。家族の絆は、両石の誇りと言ってもよいでしょう。

毎年３月３日、過去の教訓を忘れまいと釜石全体で避難訓練が行われています。私は、家族全員で必ず参加しています。行きたくないなあという私を、祖父母、両親が無理矢理連れて行くというのが、正直なところです。

朝は早く起きなければならないし、中学生は誰も参加しないし…。過去の教訓がある両石という地域に住んでいるにもかかわらず、私は、津波に対して怖いという実感もなく参加していました。

しかし、今年の７月、深夜に大きな地震がありました。私と妹は、慌てて両親の部屋に駆け込み、一晩、家族みんなが同じ部屋で枕を並べました。そのとき、ぼんやりと祖父の話を思い出していました。おじいちゃんのお父さんは、いつ津波が来ても良いように、「明日着る服は枕元においておけ」とか「靴は履きやすいように並べておけ」とロぐせのように言っていたことを。

なかなか現実味のわかない津波。それを懸命に語り伝えようとする祖父。血のつながりのある家族が伝えることこそ、私は大切だと思います。私たちは、今、家族の絆の強さを問われているのだと思います。いざというとき、どこに逃げるかを話し合っておく、誰が誰を助けるのか、普段どれだけ自分のことは自分でできるのか、すべてが家族の中でしつけられ、家族のなかで語り伝えられ、育んでいくものなのです。

両石海嘯記念碑のことを口にして、長く子孫に語り伝えよ。

祖父が私にしてくれたように、私も、いつの日か、自分の子ども、孫の手を引き、手を合わせ、語り継いでいきたい。石碑と私を結んでくれた祖父のように。

この作文は、作者が釜石東中学校三年生だった平成二〇年に書かれたものです。

両石海嘯記念碑

■資料２　東日本大震災による両石地区の被災状況

□被災した地域の様子（左：被災前／右：被災後）

東日本大震災時には、261 世帯中 234 世帯が津波により全半壊

□津波による犠牲者数

・明治 29 年（1896 年）明治三陸津波　790 人（994 人中）
・昭和　8 年（1933 年）昭和三陸津波　3 人
・平成 23 年（2011 年）東日本大震災　45 人（614 人中）

□東日本大震災で犠牲になった方の被災理由

・避難行動をせずに亡くなった方　22 人
・避難途中に犠牲になった方　12 人
・避難先で犠牲になった方　6 人
・その他（職場から帰宅、避難所から戻るなど）　5 人

□震災以前の地域の避難訓練参加状況

・平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練参加者数 99 人（当時の人口の 16%しか参加していなかった）

3.　防災知識の教育

ここでは、地震津波から命を守り抜くための“防災知識の教育”について、高知県安全教育プログラムを基本にまとめました。

3.1　ねらいと学習内容

津波防災教育で最も重要なことは、地震津波から生き抜く力を育むことです。避難所生活にかかわる問題など生き延びた後のことも大切ですが、それらは地震津波から生き抜いた上での問題です。そこで、「最大クラスの南海トラフ地震が、いつどこで発生しても、子どもたちを一人も死なせない」ことを目的に作成された「安全教育プログラム」を基本に、地震津波から生き抜くことにより重点を置いて、学年ごとの“防災知識の教育”を体系づけました。

各学年で地震津波から生き抜くためのねらい（目標）を設定しました。小学校においては、低学年・中学年・高学年と各２年間を通して１つの大きな力が身に付くように構成しました。そして、各学年におけるねらいを達成するために効果的な授業案を高知県安全教育プログラムに集録されている授業案からまとめました（下表中の赤字表記）。地震のメカニズムといったこと理科や社会と関連しやすい項目は、知識として記憶に残りやすいが、それ以外の防災知識は実生活に落としこめていない場合には、知識として定着するように繰り返し教える必要があります。

		防災知識の教育（狭義の防災教育）		
		ねらい		学習内容例
小学校	低学年	「危険を回避する力」を身に付ける	1 年生 学校や自宅でも逃げられる	①　学校や自宅で地震が来たときに身を守る方法を知る 【1　小学校 1･2 年生】地震が来らどうするか？ ②　学校や自宅で津波が来たときに身を守る方法を知る 【2　小学校 1･2 年生】津波から身を守るには？ ③　学校や自宅周辺の避難場所を知る 【3　小学校 1･2 年生】地域の津波避難場所を確かめよう
			2 年生 地域の安全な場所を知る	①　どのくらいの地震・津波が発生する可能性があるか知る 【1　小学校 1･2 年生】地震が来らどうするか？ ②　避難場所をどこにいても見つけられるようになる 【2　小学校 1･2 年生】津波から身を守るには？

		防災知識の教育（狭義の防災教育）		
		ねらい		学習内容例
小学校	中学年	「危険に気づく力」を身に付ける	3 年生 地域の危険を知る	① どのくらいの地震・津波が襲来する可能性（想定や過去の実績）があるか知る 【6　小学校 3･4 年生】南海地震が来たらどうなるの？ ② 通学路の危険な場所（近くの安全な場所）を知る 【8　小学校 3･4 年生】津波が心配！揺れたら急いで高台へ ③ 危険から身を守る方法を知る 【7　小学校 3･4 年生】どこにいても、地震の揺れから自分を守ろう
			4 年生 津波が来た場合の被害を考える	① 地震・津波の発生メカニズムを知る 【6　小学校 3･4 年生】南海地震が来たらどうなるの？ ② 津波と普通の波の違いを知る 【8　小学校 3･4 年生】津波が心配！揺れたら急いで高台へ ③ 津波から地域を守る対策を知る（ハード設備、緊急避難情報など） 【10　小学校 3･4 年生】地域の防災に関わる人たち
	高学年	「他者を思いやる力」を身に付ける	5 年生 安全な場所を教えられる	① 大地震で身の回りにどんなことが起きるか知る 【11　小学校 5･6 年生】南海地震に備えよう ② 津波避難の 3 原則を理解する 【12　小学校 5･6 年生】津波から逃げる ③ 地域へ発信する 【13　小学校 5･6 年生】災害と情報
			6 年生 率先避難者になる	① 津波の様々な特徴を知る（遠地津波など） 【12　小学校 5･6 年生】津波から逃げる ② 津波から地域を守る対策を知る（緊急地震速報など） 【13　小学校 5･6 年生】災害と情報 ③ 率先して避難できるように日ごろからできることを考える 【15　小学校 5･6 年生】これが大切！我が家の備え

	防災知識の教育（狭義の防災教育）	
	ねらい	学習内容例
中学校	1 年生 「自ら学ぶ力」を身に付ける	①　地震津波から命を守る方法を考える 【1　中学校 1 年】津波から命を守る心得は？ ②　地理的環境から地震津波考える 【2　中学校 1 年】登下校時の避難マップをつくろう ③　災害歴史から地震津波を考える 【3　中学校 1 年】南海地震とは･･･～地震・津波の発生メカニズム
	2 年生 「自ら行動する力」を身に付ける	①　災害情報から次の対応を考える 【4　中学校 1 年】緊急地震速報の仕組みと活用 【8　中学校 2 年】「警報」「注意報」の違いって？～情報の正しい理解と活用～ ②　普段と違う場面での安全確保を考える 【6　中学校 2 年】修学旅行先で地震発生！その時、あなたは？～いつ、どんなときでも命を守る～ ③　避難後の行動を考える 【9　中学校 2 年】備えて安心！～家庭の安全対策～
	3 年生 「自ら貢献する力」を身に付ける	①　災害歴史の裏側（津波被災記録を示す石碑）にある人の想いを考える 【3　中学校 1 年】南海地震とは･･･～地震・津波の発生メカニズム ②　家庭・地域啓発を考える 【12　中学校 3 年】家族との「5 つの約束事」～家族防災会議を振り返る～ ③　家庭・地域貢献を考える 【10　中学校 3 年】災害後の暮らし、あなたにできることは？ 【13　中学校 3 年】小学校や幼児と一緒に考えよう～防災かるたづくり～

4.　体験型学習の効果的手法の提案

ここでは、避難訓練をはじめとする体験型防災教育における効果的手法をまとめました。手法によっては、学年の理解度に応じて様々な目的で実施することができます（たとえば、「町探検」は『地域の避難場所を確認するため』に実施する場合と、『危険箇所を発見するため』に実施する場合など）。以下に示す表で紹介する手法は、様々な目的に応じて、適宜活用して効果的な実践に役立てましょう。

No.	効果的手法	概要 と 期待される効果
1	ビデオカメラ撮影	概要 避難訓練等の体験活動の様子を映像として記録に撮影する。撮影した資料は、次回に同様の取り組みをする際に振り返り資料とする。 期待される効果 ・映像記録資料であることで、子どもたち自身で客観的な視点から自分たちの行動を評価することができる。そして、その評価をするなかで、**改善すべき点・問題点への気づきを促す**ことができる。
2	町探検（タウンウォッチング）	概要 設定したさまざまなテーマをもとに、町のなかを自分たちの足で見て回って調べて、討論したり、レポートといった形でまとめたりする。 期待される効果 ・地域の状況を知ることができるほか、これまで関心を向けていなかったことを再発見したり、地域の問題点を発見したりできる。 ・学齢が進めば、問題点に対する解決策を考えさせる学習などにつなげることもできる。
3	マップ作り	概要 取り組み成果を自分たちでまとめて、作成したマップを使って、発表会をしたり、廊下等に掲示したりすることもできる（町探検とセットで実施）。 期待される効果 ・作成したものが掲示されていたり、発表会等を通じて大勢の前に出て発表したりすることで、自己肯定感を高めることができる。 ・地図を読む力（空間認識能力）を高めることができる。

No.	効果的手法	概要 と 期待される効果
4	聴き取り学習	概要 地域の人などを講師に招いて、体験談や言い伝えを聞く。 聞いた感想をレポートなどにまとめる。 期待される効果 ・体験談を体験した本人から聞くと、子どもたちの記憶に残りやすく、心を揺さぶりやすい。
5	保護者参観授業	概要 保護者参観日に防災授業を実施する。子ども自身の命と保護者の命に関わるような発問をする。 例)「大地震があったときに君が逃げなかったら、お父さんお母さんはどうするだろう？」 「大地震で家具が倒れて、お母さん（お父さん）が下敷きになってしまったら、君ならどうする？」 「大地震で家具が倒れて、君が下敷きになってしまったら、君ならどうする？」 期待される効果 ・保護者への防災教育効果の波及。 ・家庭と連携がとれる（保護者が防災を考える）大きなきっかけになる。

5.　各教科の地震津波災害に関連する授業内容

各学年の教科の中には、地震・津波・防災に関連する授業内容があり、これらの単元の中でも防災教育を実施することができます。児童生徒にとっては津波災害に関する内容を様々な場面で繰り返し学ぶこととなり、教育的効果も高まります。

そのための参考情報として、各教科の地震・津波に関する授業内容を以下に掲載します。

5.1　全学年共通

教科	関連させた指導方法案
国語	・読書についての発展学習で、津波に関する図書を読む ・津波関連図書を読み、作文活動や感想を書く ・レポートを書く学習で、津波や防災を題材とする ・津波や防災をテーマとした新聞づくり
図画工作 ・ 美術	・防災ポスターづくり ・避難経路図づくり ・通学路を中心とした地域の防災マップを作成する
道徳	・生命尊重 ・家族愛 ・公徳心 ・郷土愛 ・田老万里の長城 ・稲村の火
外国語活動	・Tsunami に関する図書や資料をテキストとして用いる ・ニュースの和訳・英訳 ・英語版マニュアルづくり
総合的な 学習の時間	・津波パンフレット、防災マップづくり ・防災かるたづくり ・災害対応カードゲーム教材「クロスロード」 ・体験者からの聞き取り、地域の津波痕跡調査 ・演劇
特別活動	・避難行動を知る（学校にいるとき、自宅にいるとき、部活中など） ・避難訓練に取り組む（校内での授業中、休み時間中、遠足などの郊外活動中、掃除中、特別教室や体育館などの教室以外の場所での授業中を想定して実施。そのほか、保育所・小学校･中学校･高校、地域住民と合同実施） ・長期休み前の注意 ・津波避難タワーや指定避難場所を知る ・学校内や地域の危険な箇所と安全な箇所を知る ・地震（起震車）体験 ・防災備品の使用練習（タタメット）

5.2　小学校

5.2.1.　小学校低学年

教科	単元	関連させた指導方法案
算数 （2 年）	長さを はかろう	・津波の高さを用いて、単位の変換に関する問題を作成。 *「津波の高さは土佐湾で５メートルになるらしい。では、５メートルは何センチメートル？」*
生活 （上）	みんななかよし ・わたしの がっこう どんな ところ ・わたしの つうがくろ	・学校内のいろいろな場所にいるときに地震が発生したらどうするのかを教える。 ・非常口について教える ・備蓄倉庫について教える ・子ども110番について教える
生活 （下）	わたしの 町 はっけん ・町には はっけんが いっぱい ・みんなの はっけんを あつめよう ・町の 人に つたえたい	・避難場所や記念碑等、避難標識などをさがしてみる。 ・過去に津波がどこまできたのかを確認したり、絵地図づくりをしたりする。

5.2.2.　小学校中学年

教科	単元	関連させた指導方法案
国語 (3 年)	インタビューをしてメモをとろう	・津波を体験した人の話を聞く。感想を書く。
	町について調べてしょうかいしよう	・住んでいる町のいいところを知る。
国語 (4 年)	みんなで新聞をつくろう	・消防士や警察、市職員など、防災に携わる人たちの記事を書いてみる。
社会 (3･4 年)	①もっと知りたいみんなのまち 1.わたしたちのまちはどんなまち	・町探検を活用して、避難場所や避難経路、石碑などの確認。
	①もっと知りたいみんなのまち 2.私たちの市の様子	・海と山にかこまれた黒潮町、*「おいしい魚はたくさんとれるけど、津波が来る」*ということを教える。
	④さぐってみよう昔のくらし	・過去の津波による被災状況を教える。 （安政地震、東南海地震、チリ津波等）
	⑤安全なくらしとまちづくり 2.火事を防ぎ、地震にそなえる	・震災による火災の話から発展させて、今後、黒潮町にも大きな地震が来ることを教える。
	⑧わたしたちの県のまちづくり 1.　県の地図を広げて	・沿岸地域の地形やその特徴として、地震や津波が多いことを教える。
算数 (3 年)	2 時こくと時間の計算のしかたを考えよう	・津波の到達時間を用いて、単位の変換に関する問題を作成。 *「津波は何度もくるので，避難したら３時間はそのままじっとしていることが必要です。では、何分でしょうか？」*
	11 長さをはかろう	・津波の長さを用いて、単位の変換に関する問題を作成。 *「津波は普通の波とちがって、長さが〇キロメートルもあります。では、何メートルでしょうか？」*
	18 重さをはかろう	・津波のものを動かす力の大きさ用いて、単位の変換に関する問題を作成。 *「津波が持つ力の大きさは、〇トンくらいあるらしい。では、何キログラムでしょうか？」*
算数 (4 年)	10 計算のやくそくを調べよう	・非常持ち出し袋の金額調べ

5.2.3.　小学校高学年

教科	単元	関連させた指導方法案
社会 （5 年）	②食料生産を支える人々 2.水産業のさかんな地域をたずねて	・*「海沿いで魚はたくさんとれていいけど、地震や津波の危険もある」*ことを教える。
	④くらしを支える情報 1.情報の中に生きる	・防災行政無線の役割、津波警報や注意報について教える。 ・緊急地震速報の仕組みを学習するとともに、黒潮町近海で地震が発生した場合には、緊急地震速報が地震より早くに届かない場合もあることを教える。
	④くらしを支える情報 2.情報ネットワークを生かす 「防災とインターネット」	・黒潮町には、津波ハザードマップとともに、土砂災害に関するハザードマップもあることを教える。
	⑤環境を守る人々 2.国土を守る 「自然とともに生きる」	・南海地震などの黒潮町に関わりの深い災害のほかにも、東日本大震災や阪神淡路大震災について調べる。 ・洪水や津波から街を守るための施設として、護岸工事や防潮堤工事がおこなわれていることを紹介する。
社会 （6 年）	⑤暮らしの中の政治	・災害時の政治のはらたきとして、被災者支援等を教え、過去の震災の被害や復興までの道のりを教える。 ・地域の防災まちづくり活動を紹介する。
	⑥日本と世界のつながり 2.世界の人々とともに生きる 「世界で活躍する日本人」	・海外で自然災害の被災地の支援などで日本人が活躍しているが、日本で災害が発生したときには、海外からも助けが来てもらっていることも教える。
	郷土史、黒潮町の歴史	・過去の津波被害を教える。
	新聞記事	・防災の設備や対策が日常のなかにもたくさんあることを認識させる。
算数 （5 年）	12 比べ方を考えよう（2） 1 割合と百分率	・東南海地震などの発生確率を用いて、問題を作成。 *「〇〇地震は今後 80%の確率で発生するといわれています。これを小数にしたらいくつ？」*
算数 （6 年）	8 速さの表し方を考えよう	・津波の速さを例にした問題を作成。 *「津波は陸上では、秒速〇メートルです。海岸から〇メートル離れた A 君の家まで、津波は何秒できますか？」*
理科 （6 年）	⑥土地のつくりと変化 「火山活動や地震による土地の変化」	・地震のしくみと被害の様子を教える。 ・地震の後には津波が来るということを確認する。

教科	単元	関連させた指導方法案
理科 （6 年）	その他	・実験中に地震が発生した場合に起こりうる事故とその予防や対応の仕方を教える。
家庭 （5・6 年）	1.見つめよう家庭生活 ①わたしと家族を見つめよう ②できる仕事から始めよう ③地域の人とのかかわりを考えよう	・地域の人から過去の津波被害を聞いてみる。 ・いざというときに、何ができるのかを考える。
	3.おいしいね毎日の食事 ②ご飯とみそ汁を作ろう	・地震や津波が発生した場合には、“炊きだし”といって、避難場所で自分たちが食事をつくることが必要になることがあることを伝える。 ・調理実習中や料理中に地震が発生したときの対処方法を教える。
	4.物を生かして住みやすく ②身の回りを使いやすくしよう	・活動例として、「地震から身を守るためのくふう」を考える
保健 （5 年）	2.けがの防止 4. けがの手当	・地震が発生したら、どんな怪我をする可能性があるのか、また、それを防ぐためにはどうしたいいのかを考えさせる。

5.3　中学校

教科	単元	関連させた指導方法案
社会 （地理）	第２編 日本のさまざまな地域 第２章 世界からみた日本のすがた ①変動する大地と安定した大地	・日本付近にプレートの話に付随して、地震発生や津波発生メカニズムを教える。
	第２編 日本のさまざまな地域 第２章 世界からみた日本のすがた ④自然のもたらす災害を克服する	・対策として、防波堤や緊急地震速報，避難勧告・指示などを教える。
	第２編 日本のさまざまな地域 第４章 身近な地域の調査 ④調査テーマを決めて計画を立てよう	・“黒潮町と津波”、“高知県の太平洋沿岸と地震”などのテーマで調査を企画する。
社会 （歴史）	第７章 二度の世界大戦と日本 ２ 大正デモクラシー	・関東大震災の記述から、今後、災害が発生した際に起こりうる社会問題について教える。
社会 （公民）	第１章 わたしたちの暮らしと現代社会 ３ わたしたちがつくる社会	・災害時には、高齢者や年少者を助けることが必要であることを教える。
数学 （1 年）	３章 方程式 ２節 １次方程式の利用 ① １次方程式の利用	・津波避難を例に、速さ、時間、道のりに関する問題を作成。 *「土佐湾では地震発生後 20 分で津波がやってくると想定されている。地震発生後、何分までに避難を開始すれば、無事に避難することができるでしょうか？」*
数学 （2 年）	２章 連立方程式 ２節 連立方程式の利用 ① 連立方程式の利用	・津波避難を例に、速さ、時間、道のりに関する問題を作成。 *「避難する際に、おばあちゃんの家に寄っていくことにしました。無事に避難するためには、地震発生後、何分までに自宅を出発し、おばあちゃん宅から何分以内に避難しなければならないでしょうか？」*
数学 （3 年）	５章 相似な図形 １節 相似の図形 ③ 相似の利用	・比率を求める問題を作成。 *「(建物と津波が写っている写真を用意し）建物の高さ〇メートルである。このとき津波の高さは？」*
	６章 三平方の定理 ２節 三平方の定理の利用 ① 三平方の定理の利用	・避難距離に関する問題を作成。 *「地図上の直線距離だと〇メートルである。しかし、自宅と避難場所には〇メートルの標高差がある。避難する際の道のりは何メートルになるか？」*

教科	単元	関連させた指導方法案
理科 （1 年）	単元 4　大地の変化 2 章　地震	・プレートテクトニクスに関連させて、津波の発生メカニズムや南海プレートで津波が多い理由を教える。
保健体育	保健編　3. 傷害の防止 ④自然災害に備えて ⑤応急手当の意義と基本 ⑥きずの手当	・災害発生時に起こりうるけがや、それを防止するための対策について教える。 ・救命救急法（心肺蘇生法，AED など）を教える。
技術・家庭	B 食生活と自立 ③ 調理をしよう	・調理実習を炊き出し訓練としておこなう。
	C 衣生活・住生活と自立 ② 快適に住まう 2. 安全な住まい ②災害への備え	・災害に対する家屋の安全対策（家具の固定など）や非常持ち出し品として用意しておくものを教える。
	C 衣生活・住生活と自立 ③ 生活を豊かにする物をつくる 2.布を用いた物の製作 ② 製作して、活用しよう	・防災頭巾をつくる。

黒潮町津波防災教育プログラム（案）の作成について

黒潮町津波防災教育プログラム（案）の作成にあたっては、黒潮町内の小中学校の教職員、黒潮町教育委員会、黒潮町教育研究所からなる作業部会を設置し、群馬大学災害社会工学研究室のアドバイスのもと、それぞれの有する経験や知見、情報等を活かして意見交換を重ねてきました。

平成 26 年度は、「黒潮町津波防災教育プログラム（案）【平成 27 年 3 月版】」を黒潮町内の全小中学校に配付し、平成 27 年度以降には本プログラム（案）を基に、モデル校における模擬授業（公開授業）や防災教育に関する研修会などを実施して、更なる効果的なプログラム（案）への改訂を進めていきます。

＜作業部会の構成＞

黒潮町内の小中学校	黒潮町立拳ノ川小学校 黒潮町立伊与喜小学校 黒潮町立佐賀小学校 黒潮町立上川口小学校 黒潮町立南郷小学校 黒潮町立田ノ口小学校 黒潮町立入野小学校 黒潮町立三浦小学校 黒潮町立佐賀中学校 黒潮町立大方中学校
アドバイザー	群馬大学災害社会工学研究室 （片田敏孝 教授、金井昌信 准教授）
事務局	黒潮町教育委員会 黒潮町教育研究所 黒潮町情報防災課 株式会社アイ・ディー・エー

黒潮町津波防災教育プログラム（案）

平成 27 年 3 月
黒潮町
黒潮町教育委員会
群馬大学災害社会工学研究室

制作：株式会社アイ・ディー・エー　社会技術研究所